OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | キンダーカウンセリングのコンサルテーションにおける保育者への心理臨床学的支援 |
| Author(s) | 原口, 喜充 |
| Citation | 大阪大学, 2021, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/81979 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　原口　喜充　） | |
|---|---|
| 論文題名 | キンダーカウンセリングのコンサルテーションにおける保育者への心理臨床学的支援 |

論文内容の要旨

本論文は，日本における保育心理臨床の一形態であるキンダーカウンセリングにおいて，その活動の特徴を生かしつつ，保育者の心理的側面も視野に入れた支援を行うためのコンサルテーションモデルを検討したものである。また，そのコンサルテーションモデルで用いることのできる，保育者の心理モデルについても併せて検討した。

本論文は4部9章から構成されている。

第1部（第1章～第3章）は理論編とし，国内外の先行研究を概観した上で，その問題点と本研究の目的を示した。第1章では，保育/キンダーカウンセリングの概要を示し，キンダーカウンセリングにおけるコンサルテーションの重要性やあり方，実践・研究上の問題点について論じた。

第2章では，主要な二つのコンサルテーションモデルである精神衛生コンサルテーション（Mental Health Consultation）と行動コンサルテーション（Behavioral Consultation），本邦における従来型の保育コンサルテーションである巡回相談について概観した。キンダーカウンセリングにおけるコンサルテーションとの比較・検討を行い，キンダーカウンセリング独自のコンサルテーションモデルの必要性を指摘した。

第3章では第1章と第2章での議論を踏まえ，本研究における問題と目的を示した。

第2部（第4章～第6章）は調査編とし，筆者が実施した調査研究の結果を示した。

第4章と第5章では，保育者の心理に関する研究である研究1と研究2を報告した。第4章では，研究1として保育者を対象にした質問紙調査から，保育者のメンタルヘルスと省察の関連について検討した。分析の結果，クラスター分析から省察，ストレス，保育者効力感のパターンが異なる5群が得られ，メンタルヘルス指標であるバーンアウト傾向にも違いが見られた。保育者の心理的な状態によって，省察がメンタルヘルスに与える影響が異なることが示唆された。得られた結果を基に，コンサルテーションにおいて保育者の心理的な状態を見立てることが必要であると考察した。

第5章の研究2では，日々の保育や業務における保育者の心理・主観的体験について，インタビュー調査を行った結果を示した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った結果，①保育者の体験の背景には保育や子どもに対する想いがあること，②保育者の日常における主観的体験としては，保育者と園児の「楽しいが一致」しているか否かが重要な要素であること，③保育者の主観的体験の変化に保護者や他の保育者といった他者の存在の影響が大きいことが示唆された。

第6章では，研究3として，保育者が臨床心理士を含む心理専門職全般に対して抱いているイメージについて，インタビュー調査に基づいて検討した。SCATを用いた分析の結果から，保育者が保育や心理専門職との協働の経験を重ねる中で，心理専門職への認識や協働のあり方，心理的な見方の位置づけを変化させていく過程について考察した。

第3部（第7章・第8章）は事例編とし，筆者が経験した保育者との継続的なコンサルテーション事例を用いた事例研究を行い，コンサルテーションのあり方について考察した。第7章の研究4では，キンダーカウンセリングにおけるコンサルテーションでは，助言だけでなく保育者との関係性やプロセスという視点が重要であることを指摘し，園児ではなく保育者を中心に事例を考えていく「この人（保育者）とのコンサルテーション」という視点を示した。

第8章の研究5では，コンサルテーションにおいて保育者の葛藤に着目したことが奏功した事例を検討した。事例研究を通して，園児の心理・発達や関わり方について話し合う中で，保育者の悩みや葛藤といった心理を感じ取り，保育者が納得できるようにコンサルテーションを行うことで，保育者の心理的な変化につながることを示した。

第4部（第9章）は総合考察とし，各章の議論から得られた知見を整理したで，それらの知見を踏まえ，新たなコンサルテーションモデルである「開花コンサルテーション」及び，支援のための保育者の心理的なモデルである「保育者-園児」元型モデルを提示した。最後に，本研究の限界と今後の展望について論じた。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　原口　喜充　） | |
|---|---|
| 論文審査担当者 | （職）　氏名<br>主査　教授　老松　克博<br>副査　教授　村上　靖彦<br>副査　准教授　佐々木　淳 |

## 論文審査の結果の要旨

この研究は，わが国の保育心理臨床の一形態であるキンダーカウンセリング（以下，KC）において，その活動の特徴を活かしつつ，保育者の心理的側面も視野に入れた支援を行なうためのコンサルテーションモデル構築を目指す，野心的な試みである。併せて，そのコンサルテーションモデルに適した保育者の心理モデルも検討している。

本論文は４部，９章から成る。第１部（第１～3章）は理論編で，国内外の先行研究を概観し，問題点と本研究の目的を示す。第１章では，保育/KCの概要を述べ，KCにおけるコンサルテーションの重要性やあり方，実践・研究上の問題点を論じている。第2章では，既存の主要なコンサルテーションモデルである精神衛生コンサルテーションと行動コンサルテーションにふれ，本邦の従来型の保育コンサルテーションである巡回相談（発達臨床的）を紹介したうえで，KCにおけるコンサルテーションと比較・検討し，KC独自のコンサルテーションモデルの必要性を指摘している。そして，第３章で，以上の議論を踏まえて，本研究における問題意識と目的を示している。

第２部（第４～６章）は調査編で，保育者の心理に関する実証研究を行なっている。第4章の研究１では，保育者への質問紙調査から，保育者のメンタルヘルスと省察の関連を検討している。クラスター分析から，省察，ストレス，保育者効力感のパターンが異なる５群が得られ，メンタルヘルス指標であるバーンアウト傾向にも違いがあった。保育者の心理的な状態によって，省察がメンタルヘルスに与える影響が異なることが示唆された。得られた結果をもとに，コンサルテーションでは保育者の心理的な状態を見立てる必要があるという重要な指摘をしている。

第５章の研究２では，日々の保育や業務における保育者の心理・主観的体験に関するインタビュー調査を行なっている。修正版GTAによる分析により，①保育者の体験の背景には保育や子どもに対する想いがある，②保育者の日常における主観的体験として，保育者と園児の「『楽しい』が一致」しているか否かが重要である，③保育者の主観的体験の変化には保護者や他の保育者などの他者の存在の影響が大きい，といった興味深い結果を得ている。

第６章の研究３では，保育者が心理専門職全般に対して抱いているイメージについてインタビュー調査を実施している。SCATによる分析の結果をもとに，保育者が保育や心理専門職との協働を重ねるなかで，心理専門職への認識や協働のあり方，心理的な見方に対する位置づけを変化させていくことを見出し，考察を重ねている。

第３部（第７～8章）は事例編で，著者が経験した保育者との継続的なコンサルテーション事例を用いた事例研究を行ない，コンサルテーションのあり方を検討している。第７章の研究４では，KCにおけるコンサルテーションでは，助言だけでなく保育者との関係性やプロセスが重要で，園児ではなく保育者を中心に事例を考えていく「この人（保育者）とのコンサルテーション」という視点が必要であることを説得的に示した。

第８章の研究５では，保育者の葛藤への着目が奏功したコンサルテーション事例を検討している。園児の心理・発達や関わり方について話し合うなかで，保育者の悩みや葛藤といった心理を感じ取り，保育者が納得できるようにコンサルテーションを行なうことが保育者の心理的な変化につながる，ということを慎重な議論によって示した。

第４部（第９章）は総合考察になっており，各研究から得られた知見を踏まえて，新たなコンサルテーションモデルである「開花コンサルテーション」を構築し，支援のための保育者の心理モデルとして「『保育者－園児』元型モデル」を提示している。

本論文は，多角的なアプローチによって得られた価値ある知見にもとづき，KCに関するオリジナリティに富んだ意義深い提言を行なっている。近年ようやく緒についた保育心理臨床に関する本格的研究をリードする労作と考えられる。論文審査の結果，本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。